図書館協議会委員と教育長による懇談会　要録

日　時　令和４年９月 26 日（月）　午後５時 30 分開会 午後６時 50 分閉会

場　所　武蔵野市立中央図書館視聴覚ホール

出席者　委員９名
　　安形会長、小池副会長、赤沼委員、桂委員、川田委員、竹内委員、
　　花谷委員、宮代委員、松山委員
　事務局 10 名
　　【中央図書館】目澤館長、前田課長補佐、秋庭係長、林係長、
　　中野主事、原島主事、大島主事
　　【武蔵野プレイス】平之内館長、坂本副館長、盛田課長補佐

テーマ
　①　学校と公立図書館の連携について
　②　まちづくりにおいて図書館に期待することについて

＜開会＞（午後５時 30 分）
【図書館長】
懇談会　趣旨
図書館法に基づく本市の条例に基づき、今年度より協議会が始まった。
教育長も皆さんの意見をお聞きしたいとのご意向である。

【教育長】
図書館運営委員会の頃から課題だった市条例を設置根拠とする図書館協議会を設置したのはかなり大きな変化だった。本日は、学校の状況も含めて、みなさまからのご意見を伺いたい。
まず、学校と公立図書館の連携についてご意見を伺うにあたり、今後の予定をお知らせしたい。１００年校舎とうたっている大野田小学校と千川小学校を除く小学校 10 校と中学校６校について、順を追って改築していく予定である。第一中学校と第五中学校については、すでに仮校舎で授業を行っている。

これからの学校図書館には、読書センター、学習センター、情報センターとしての役割が求められている。これにより、教室という壁を越えた、子どもたちの学び方の変化が見込まれる。
また、学校図書館はフロアの一番奥にある配置されているイメージがあるが、ラーニングコモンズという発想で、校舎の中央に学校図書館を設置し、各教室と緩やかにつなぎ、今後求められる３つのセンター機能を果たすことを目指している。学校改築に合わせて未改築の校舎においても加速させていきたい。
学校教育については、一昨年から人によっては 100 年に１度と言うほどの学習指導要領の改訂があった。今までは知識の授与が主だったところ、思考・判断・表現力も含めた資質を個別最適な学びと協同的な学びを一体的に充実させながら求めるようになった。そのため、読書活動は情報活用能力の向上のためさらに重要になってくると思われる。
さらに、空間として学校図書館を設置するだけではなく、現在配置している図書館サポーターの常駐化などで、子どもたちの学びを支えていきたい。配置時間の増加で、たとえば、中学校の場合は、昼休みや放課後等に自分で調べて学びたい生徒の要望や、「関連する本を借りたいという」要望に応えることなど期待できる。
学校図書館と市立図書館の連携については、平成 21 年頃から進め、開始からの 10 年間で学校図書館の貸出数が 30 倍になった。市立図書館の本の流通量が増えていることについても、図書館サポーターの充実で対応させていきたい。
子どもの読書活動推進計画の理念には、読書習慣を身に付け豊かな心を培うことや多様な読書を通じて学ぶ力を身に付けること、情報を読み解き情報を活用する能力を育むことを掲げた。その中で、多様な読書については、子どもたちが好きな時に読めるよう、学校図書館に新聞を２紙以上設置した。中学校については、新書の配置？充実を進めている最中である。このように、絵本や小説の９類だけではなく、いろいろな分野に興味をもってもらえるような環境を整えていきたい。
このような取組を進めていく中で、空間としての学校図書館だけではなく、スタッフの配置やどのような情報、資料をそろえるか、活動についてもご意見を伺いたい。

【会長】
スタッフの常駐化は、児童や生徒が調べたいときに支援してもらえる点がよい。複数校の図書館を受け持つ場合は「サポーター」と言えるかもしれないが、学校図書館サポーターをやっているかたにとっては、常駐なのであれば、「学校司書」などのもっとオフィシャルな名称にすることが意欲につながるのではないか。

また、情報の活用という点については、たとえばコロナウイルスやウクライナ情勢など、信憑性の低い情報がネット上で出回っている時代であるため、そのような情報に子どもたちが惑わされないよう、学校司書が伝えられる。たとえば、コロナウイルスの場合は厚労省のサイトを示すなどの方法がある。ウクライナ情勢についても、検索エンジンなどの翻訳サービスを利用することで、原文がロシア語やウクライナ語であっても日本語に翻訳して閲覧できるようになっており、便利な一方で情報の信憑性には注意が必要であるため、学校司書によるナビゲートが重要である。
ラーニングコモンズについては、GIGA スクール構想により子どもたちが１人１台端末を所有する以前のグループ活動等で活用されるイメージが強い。そのため、端末を持っている環境でのラーニングコモンズのあり方をどうとらえるかは難しい。

【教育長】
端末については、以前は４人１組に対して１台が割り当てられ、１人がまとめて入力を行っていた作業が、全員で作業や共有もできる状況になった。ある場面では端末を使って調べる生徒もいれば、紙の辞書で調べる生徒もいるというように、生徒や場面に応じた活用方法が可能になった。文具に近い存在として端末が使用されている印象である。そのため、会長がおっしゃる通り、端末の使われ方により、ラーニングコモンズのとらえられ方が変わっていく可能性はある。情報活用能力という点では、ネット上の情報の真偽をどのように見極めるかというクリティカルシンキングのためにもスタッフが必要である。
また、学校図書館サポーターが市立図書館とさらに連携することで、学校図書館サポーターのスキルの底上げを図りたい。

【会長】
学校図書館サポーターの雇用主は、図書館なのか教育委員会なのか。

【教育長】
教育委員会である。

【委員】
学校図書館サポーターは市立図書館ではなく、学校図書館のサポーターという認識でいいか。

【教育長】

そのとおりである。

【委員】
やはり名称は重要である。「サポーター」というと補助的なイメージが強くなる。

【教育長】
一部の学校図書館サポーターからは、「学校司書」と呼んでほしい旨の意見がある。

【会長】
他の自治体において、「学校図書館支援員」という名称を「学校司書」等への変更を検討しているという話を聞いたことがある。法律の改正に先行して取り組んでいる自治体ほど、「学校司書」以外の名称であることが多い状況ではある。

【委員】
大野田小学校のオープンスクールで学校図書館を訪ねた。学校図書館サポーターに話を伺えた。本と子どもをつなぐ役割だけでなく、本の修理や教員からの依頼で調べ学習用の資料を図書館から取り寄せる等の実務が多く、余裕がないという印象を受けた。「端末のみではなく、本も使って調べてみよう」という、本に目線を向ける役割を担う人が、子どもたちが集まる１時間でもいいのでいた方がいいのではないか。１人の役割を増やして名称を変えるというのではなく、いろいろな人が関わるとよいのではないか。

【会長】
学校図書館の運営を管理する司書教諭という立場があるが、担任をもっていたり、授業担当があったりするため、司書教諭がどの程度学校図書館に関われるかについては、学校の状況により異なる。しかし、学校図書館サポーターと司書教諭が、教育に係る理想の部分を話し合うことができれば大分違うと思われる。

【委員】
小学生の次男と高校生の長男では、調べ方に差が出ている。長男はネットと本を行き来するかたちで調べているが、次男は最初からネットありきで、本に視線を動かすことがない。そのため、両方を行き来することをサポートしてくれる人がいるといい。

【教育長】

多様な情報にアクセスすることができ、選択肢の幅が広がった一方で、ＰＣのみで調べ学習を完結させてしまうという点は危惧している。

【会長】
ネットの情報の信憑性には差があるため、ネットの情報を一部使う場合でも、信頼できる情報源を見極めることが重要である。また、本だからといってすべて信頼していいわけではないが、出版までのプロセスで一定の正確性は高められる可能性は高い。データベースを学んだうえで使用することがいいと思われる。ただし、全てを学校司書に負わせるということは、すぐには無理だろう。本とネットのハイブリットで学習する世代にとっては、たとえば学校のプログラミングの授業が面白かったから自宅でもタブレットを長く使用すると同時に、物語は図書館で本を借りている子どももいる。

【委員】
物語については、クラス文庫で借りて休み時間に読んでいる姿が見られた。オープンスペースで様々な本が置いてあり、通りがかりに目にするだけでも違うのではないか。

【会長】
たとえば、小学生にフェイクニュースに惑わされないよう伝えることは難しい。大学生なら理解できても小学生に「政府のサイトが」と伝えても伝わりにくい。たとえば、大手新聞社の記述は大丈夫と伝えても、新聞を購読している家庭が少なく、新聞そのものを知らない子どもたちがいる状況である。各学校図書館に２紙以上そろえているというお話であったことはいいことであるが。

【教育長】
情報を見極める力は教員の力量によって差はあるが、全体として蓄積されてきている状況ではある。教育委員会としては、「フェイクニュース等は危ない」と脅して遮断するのではなく、最終的に子どもたちが情報を見極める力を身に付け自立していけるように考え、実践の蓄積を進めているところである。

【会長】
ラーニングコモンズで端末を使用することを前提とするのであれば、電源コンセントを一定以上用意していくのが良いのではないか。

【教育長】

現在、小学３年生以上は、毎日自宅に端末を持ち帰り、充電してもらうことにしている。小学１、２年生は、学校で充電を行っている。

【会長】
学校で配布されている ChromeBook にもフィルターは設定されていると思うが、信憑性の低いサイトを開いてしまう可能性はある。端末を自宅に持ち帰る小学高学年以上に対しては、そのようなサイトを開いた際に自分で冷静に対処できるように伝えることも必要である。ただし、大人たちでも詐欺にあっているような現状であるため、本当に教えられるのかは難しいところである。

【教育長】
中学校を卒業した 15 歳以上については、市教育委員会で対応することができなくなるため、それまでに一定の力を身につけてほしいと考えている。
時間の都合があるため、まちづくりにおいて図書館に期待することについてのご意見を伺いたい。中央館を直営とする方針のもと、行政職員が図書館運営に携わることのメリットはある。地域図書館としては司書のスキルが中心とも言えるが、図書館行政としては行政職員の力も必要である。どのように図書館を運営するかを考えるにあたり、まちづくりとしての図書館行政について気になっているところである。
吉祥寺図書館をリニューアルする際になされた議論であるが、60 代以上の利用者が４割程度である。過去、私が福祉分野に携わっていたときは、特に定年退職後の男性はデイサービス等の福祉サービスに繋がりにくい状況であった。そのような方にも図書館は利用していただきやすい場所であることから、そのような方が社会とのつながりをもてるような仕掛けを図書館が行っていくことはどうかと考えている。本人のご意向も踏まえながら、押し付けとならないようなかたちで、利用者が緩やかにつながれるような場所としての図書館が追求できないか。
以前、武蔵野プレイスにおけるボランティアスタッフについてもなされた議論であるが、そのような方が力を発揮できる役割や場面を図書館がどのように用意できるか。
図書館サービスの機能を向上させていくことも必要だが、武蔵野市として図書館を通じたまちづくりをどのように果たしていけばいいのか。中央は直営、地域館は指定管理というスタンスが定まったところで、気になっているところである。

【会長】

専門職性から、図書館の運営は10から20年のスパンで考えていくべきである。行政職員は異動が前提であり、せっかくのノウハウが図書館側に残らなくなってしまう。他の自治体では、武蔵野市のエキスパート職にあたるかたちで図書館に残っている職員がいて、少なくとも前任者と後任者が同時期にいるようにしているところもある。利用者の緩やかなつながりをつくっていくという思いがあっても、そのせっかくの思いが異動により断絶してしまうことになる。長期にわたるポリシーが継承できる、蔵書方針に一貫性をもたせるような職員がいると良いのではないか。

【教育長】
大きな課題であるが、市の人事担当部署との調整を行っているところである。

【委員】
子どもの分野ではあるが、図書館の０歳や３歳のブックスタート事業で行政サービスに触れ、そこから0123等の施設の利用につながることもある。私自身としても、図書館が行政サービスに触れるファーストステップとなり、次のステップへつながったと感じている。同じように、図書館が高齢男性等にとってのファーストステップとなれる方法があるのではないかと思う。
私自身の祖母の図書館カードを作るにも本人を連れて来館する必要があり大変であったため、高齢のかたのカードを作るなどのイベントを開いてはどうか。本を借りてみることから、他の施設の利用につながるかもしれない。

【会長】
特に退職された方は時間がある場合が多いため、ほぼ毎日のように来館されているかたがいる。その一方でほとんど利用されない方もいる。利用されない方に来館いただくようにしたうえで、コミュニティ機能を備えられるといい。昔とは異なり、今どきの図書館ではイベント等で利用者同士のつながりを築けるのではないか。たとえば、スマートフォンの使い方に苦労している高齢のかた向けの講座を開くことで、人集めになるのではないか。

【委員】
「健康」とセットで呼び込みを行うこともできる。たとえば、図書館で体操教室を実施することが考えられる。図書館独自だけでなく、市で取り組んでいるイベントをその一環として、図書館で実施することはどうか。

【委員】

先日、プレイスのマジックショーに参加した際には、子どもたちはショーを見た後に、後ろに並んでいるマジック関連の本を読んでいた。そのようなイベントを、高齢のかた向けにも行ってみてはどうか。

【教育長】
図書館に行って本や新聞を読めれば満足というご意向をおもちの方もいらっしゃるが、福祉の面からみた他市のある施設の例では、その施設を毎日利用しているある認知症の方は、ご自身をその施設で働いているスタッフとして認識していらっしゃって、「自分がその施設に行かないと利用者が困る」ということで、その施設に通っている。その居場所で役目を持つことが自身の幸福感につながっている面がある。
図書館でもそのように利用者が自身の役割をみつけられるような取組ができないか。ボランティア活動を強いるのではなく、そのかたの生きがいや人のつながりが生まれるための取組である。

【会長】
コロナ感染のリスクを避けるために、高齢のかたが外出されなくなったが、一定程度落ち着いてきた段階で、少しでも外に足を運んでいただけるようなイベントができるとよい。

【委員】
市武蔵野市では、福祉に加えて子ども施策にも力入れており、子どもの数が増えている。図書館はどの年代も関われるため、多世代交流の場として適していると思う。そのため、イベントで人を集めることも可能であり、たとえば、ビブリオバトルやかるた大会等を多世代で実施してみてはどうか。

また、公園や定休日の施設駐車場、団地などにおいて、スポット的に図書館機能を展開するような移動図書館はできないか。他事業でもマルシェなどで交流が生まれている。マンション内の移動も困難な高齢者や小さな子どもがいるかたにとっては、たとえば八百屋が移動で来てくれるだけでもありがたい。ゆったりとした空間をみんなで共有できるとよいのではないか。
現在、0123 はらっぱでブックポストが試行されているが、小さい子どものいる家庭からは、「本を返す負担が減っている」と聞いている。

【会長】

移動図書館については、高度経済成長期に多摩地域で多く実施されていた、現在はほとんど実施されていない。移動図書館が少なくなった経緯も踏まえ、検討すべきである。

【委員】
子育て世帯のニーズに応えている行政として、高度経済成長期の移動図書館とは違う方法での実施であれば可能性はある。

【副会長】
移動図書館がなくなっていった経緯は、一般的には近隣に図書館ができたからである。図書館が行っていることを発信して、相手からきてもらう方向になった。

【会長】
プレイスは場所柄がよいが、中央図書館の場合来てくれるか。

【副会長】
その場所に来てくれる人を対象にするのが基本であるが、３館それぞれの特徴が異なる。そもそもニーズがあるかどうかが重要である。

【委員】
図書展示や過去のアーカイブなど、図書館の中だけでやっていたことを外へ届けていくことはできる。

【会長】
新しいタイプの移動図書館として、人が集まるスポットへ出向き、市民に来てもらうこともできる。たとえば、マルシェやフリマへ図書館も出展するなど。その場合、本を返却しやすくするため、図書館は定期的に回す仕組みが大事になってくる。

【副会長】
移動図書館は定期的に回る必要があるが、それを盛り込むか、あえて止めるか。

【会長】
図書館が主体になった車があれば可能性はある。

【副会長】
移動図書館を書架としてとらえ、車が出払っている際は「書架が外出しています」という最初の設計コンセプト

【副会長】
石川県の図書館では、子ども室の中にアスレチックがあり、子どもが図書館内を走り回ることができる。敷地が広いからできることではあるが、子どもを連れてくる場になっている。来館者は図書館で自分の好きなことをやっている点に変わりはないが、図書館への考え方の変化が見られる。

【会長】
プレイスも開館前や開館当初には、カフェの匂いや他のフロアの声についてのネガティブな議論があったが、今では朝日クロスワード？で東エリア１位になるほどの評価を得ている。

【委員】
先ほど話にでた学校の図書室中心の形式は他の改築する学校もそうなるのか。

【教育長】
第五小学校と井之頭小学校についても、コモンズの考え方で改築を進める。小学校では若干変わるかもしれないが、中学校については、子どもたちは、「授業を受ける」という一方的なものではなく、「自分たちで学びを作る」という趣旨も含めてコモンズという言葉を使っている。

【委員】
学校の図書の時間が減ってしまった中で子どもたちが図書に触れる時間が増えるのはよい。

【副会長】
自分が調べたことを表現していく場、交流の場とする上で学校の中心に図書館があるのは重要である。

【教育長】
学び自体、先生が一方的に知識を伝える形式から知識更新の社会で生涯自ら学び続ける資質を育む形になるだろう。その主体性を大事にしたい。

【会長】
副会長が仰っていたよう、まずは図書館が学校真ん中にあるだけで違う。
さらに現在の教育では小学校低学年から調べて発表するのは今どきあり得る。
そのため、小学校の低学年からであっても自ら居心地の良い空間について提案できるくらいの形が取れるとよい。

【教育長】
長時間に渡る議論を感謝する。

＜閉会＞（午後6時50分）